東京ボランティア・ネットワーク　サマーワークショップ

＝＝＝講演とパネルディスカッションから＝＝＝

第１部　講演『外国人から見た日本語教育』

講師のプロフィール

明治大学教授　ジェームズ　バワーズ先生

ジェイムズ・バワーズ
James R. Bowers

1945年米国サウスカロライナ州生まれ。67年イリノイ州立大学人文学部言語学科卒業。ハワイ大学ＡＢＴ。79年明治大学専任講師を経て現在教授。国際交流センター創設とともに学術交流専門部会メンバー。元日本コミュニケーション学会会長、現理事。先頃放映の「ストックホルムの密使」（NHK）でも、主人公の一人として名優ぶりを発揮。著書に文部省検定英語教科書等多数。

文法優先はやめて、使える日本語を

私は英語教育に携わったことが多少あるが、日本語を教えた経験は少ない。だから自分が英語の教科書を執筆した時のことや、英語教師の指導をした経験から、私が感じた日本語教育法について話をしたいと思う。

外国人にとって最も基礎的で重要なのは発音である。発音指導は系統的、段階的になされなければならないと考える。例えば、英語を話す人にとって「つ」と「す」の区別が非常に難しい。それと同じぐらい難しいのが、母音の長さである。日本語では短母音と長母音を区別するが、外国人にとってこれは非常に難しいことである。「とり」と「とおり」が区別できない。これを最初から指導しないと、周りの日本語が聞こえなくなる。自然に耳から日本語が入ってくる環境にいることができたら一番いい。なぜなら、私が日本語を勉強していた時に、講義が理解できても、街で話されている日本語がわからないという不安の声が仲間から挙がったからだ。

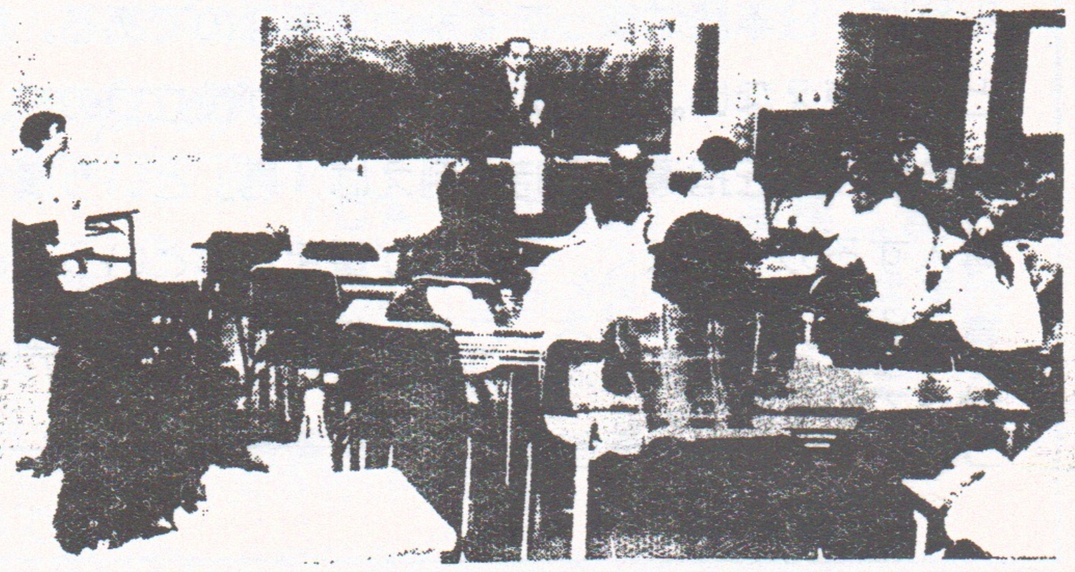
では、どういう形で指導したらいいのか。まず第１に、文法優先の教え方は良くない。例えば、文法説明がなく、例文をたくさん挙げている教科書がある。

「野外の音楽会に行く」「アメリカに広大な平野がある」

このように少しずつ文の形が変わっていくから、使いながら自然に文法の形が分かるようになる。学んでいくうちに、こういう時はこう使うんだと理解させる。コンテクストが非常に重要なのである。

次に使える日本語を教えていただきたいということだ。例えば、「あなたは何人（なにじん）ですか」とは言わない。「どこの国の人ですか」という言い方が普通だ。できるだけビデオ教材やマンガなどを使えば自然な日本語が出てくるので、授業が終わって外へ出た時でも、街の会話を理解することができる。

日本にいれば、話すことと聞くことのほかに読み書きも学ぶ。たいていはひらがなの「あいうえお」から始まる教科書が多いが、カタカナで始まるものがある。「アジア・アメリカ・イギリス……」など。外来語はカタカナで書かかれているから、意味が理解しやすい。つまり、学ぶ負担を少なくできるのである。同時に、街にある看板はカタカナ表記が多いから、生徒はそれを見て、その日学んだことが役にたったと実感できる。単に「あいうえお」を教えるのではなく、使えるものから提示し、ある程度理解してから五十音をまとめとして教えるようにした方がいいと思う。



効果的な教え方とやめてほしい教え方

漢字について言えば、私が使っていた教科書は「田」を教える時、まず「だ」と教えた。当時は日本に来るのに羽田から入ってきていたから「田」の形には馴染みがある。形から意味を教えるのである。その後にもう１つの読み方、「た」を紹介する。このようにしていけば理解しやすい。

辞書については、なるべく使わないことを勧める。初級と上級では辞書が役立つが、中級では使わないようにする。新しい文型を出す時は以前学んだ単語を使い、新語を出す時は以前学んだ文型の中で出すやり方をすれば、辞書を使う必要がほとんどない。忘れた単語等は先生や友達に聞けばいい。このやり方だと、辞書を使わずに、単語をどんどん覚え、自然な日本語の使い方を学ぶことができるのである。

逆に、こういうやり方はやめてほしいというものが２つある。１つ目は、暗記させる時に、「神戸へ行きたい」という例文を出し、何度も声を出して繰り返させること。これは、言語の教授法として望ましくない。心理的問題や記憶の問題と関わりがあるからだ。人間には、記憶の機能が２つある。１つは短時間のものを覚えている機能と、長時間のものを覚えている機能である。数字を例に挙げると、一度に簡単に覚えられる数字は七桁までである。以前、東京の電話番号が七桁だったのを思い出していただきたい。４６５－２２４５はとても簡単だが、３が頭に付いて八桁になると覚えにくくなる。七桁以上は他の方法をとらなければならない。では、どうやってこれを長期的なメモリーに入れたらいいのか。３４６５－２２４５を「３４６５－夫婦良い（２２４５）」というように、もう１つの意味とつなぐのである。あるいは、１つの単語をイントネーションを変えて言う。単なる繰り返しということではなく、意味とつなげた形で紹介していくことが重要なのである。

生徒中心の授業で、コミュニケーションを学ぶ

２つ目は、日本で日本語を学ぶ外国人は、コミュニケーションの勉強を希望しているということだ。コミュニケーションの機能を学ぶために、生徒同志で多くの活動をしなければならない。つまり教師中心の授業ではなく、生徒中心の授業が非常に重要だ。生徒が小グループを作って、生徒同志で日本語を使う。教師は生徒の周りを歩き、問題がある時には指導をしたりする。こうした授業の形が非常に重要だ。英語の教科書には日常的な教材がたくさんあるが、残念ながら、日本語の教材の中には、コミュニカティブアプローチを使った教材が少ない。だから他の教材からアイディアを取り、日本語教育に置き換えることが必要だ。例えば、星座の説明があるとする。どこの国の人でも星座については知っているから、そういうものを言語活動の材料として使うことができる。そこから、「こういうことなら私にもすぐできる」と自覚ができ、学ぶ姿勢が前向きになる。できるだけ単語や文だけが中心の教材を使わず、もっと大きなレベルのものを使っていただきたい。これは教科書で練習した単語や文を、手紙や短いストーリーの中で、何度も使うということだ。本物の手紙でも、教師が書いた手紙でもいい。授業で学んだものが、実際に日常の中で繰り返し紹介されることが重要なのである。

最後に、自分の生徒が日本人でないということを忘れないでほしい。当たり前のことだが、外国人からみれば、日本語はまったく別の言葉なのである。日本の文化と言葉を同時に勉強しなければ、日本語はほとんど使えない。外国人にとって何が役立つのか、何が大切なのかという考え方が重要なのである。日本語の読み方を指導する時、例えば「鳥」という漢字を指導してからいろいろな種類の鳥、白鳥や鶯などを導入するのではなく、その逆が望ましいということなのだ。なぜなら、はっきりしたイメージがあれば、覚えやすいからである。こうした考え方を、外国人に日本語を指導する時の１つの大きなポイントとして覚えていてほしい。

第２部　パネルディスカッション
『これからの日本語ボランティア』

《学習者の立場から》

ボランティア日本語教室の魅力

弥生日本語の会（文京区）　王　暁民

私にとって、ボランティア日本語教室の一番の魅力は、一対一の授業方式と自由な雰囲気です。私は自国で日本語を勉強しましたし、学校の日本語コースをとったこともあります。ここでの勉強は、私の日本語の養成にたいへん役立ちましたが、授業方式は教科書に従った形で１０人、２０人が一緒の授業でした。先生との会話練習が少なく、自分の学んだ日本語と日本人学生が使っている日本語が違うように感じました。テレビドラマを見ていても、分からない表現が多々あります。やはり、生きた日本語を勉強したいと思いました。

１つの言語を理解しようとする時、文法よりも文化背景の方が大切です。よく、留学生から次のような質問を耳にしました。言葉は理解できるのに、どうして相手の話がわからないのか。これは、日本人が当たり前とする文化背景が、外国人には理解できないからなのです。この点から見ると、ボランティア日本語教育は、学校が行う日本語コースの有力的な補充というよりも、むしろ文化的な交流や相互理解の面で独特な役割があると言えます。これがボランティア日本語教育の魅力の源だと思います。

《日本語ボランティアの立場から》

日本語ボランティアをアピールしよう

多摩市国際交流センター　井上　和美

この夏、私は「外国人生徒、帰国子女の日本語教育」という教員の研修会で、次のような話を耳にしました。「日本語ができないばかりに、いじめられたり、トラブルをおこしたりする子ども達がいる。日本語の上達した子どもと、日本語の話せない母親との間に摩擦が生じている。母親は地域の人と交流をもてず、家の中に閉じこもりがちになる。日本語学校は費用が高く行くこともできぬ親たち…」等。

私は、東京に日本語ボランティア教室のあることを話しましたが、外国人生徒の指導にあたっている先生方に、その存在が知られていない現状を知り、驚きました。さっそく「東京ボランティア日本語教室ガイド・９５年度版」（訂正表）をコピーし、希望の先生方に配布しました。いずれの学校でも、多少の差はあれ、外国人生徒に日本語学習をさせる配慮はなされていますが、親御さんに対しての配慮までは手がまわらず不自由な生活をしている方が多いようです。異国日本で暮らす外国の子ども達の健全な成長と、親子の幸せな日々を願う上からも、ぜひ、現場の先生方にボランティア日本語教室のアピールをしていくことが大切ではないかと思います。

《日本語ボランティアの立場から》

ＪＣＡの現状と私の期待

ＪＣＡ（世田谷区）　高橋三智子

ＪＣＡは１０余年前、３人の主婦が近くに住む外国人を手助けするために、世田谷区千歳船橋に生まれました。日本の国際化とバブル経済の波に乗って、気付いてみたら１４教室、日本人会員約３２０名、外国人会員約３５０名（約４０カ国）もの大所帯になっていました。各教室の日本語指導は一対一の形をとっていますが、外国人会員の入れ替わりは本当に激しいです。

運営は、各会員からの会費で賄われている民間団体で、現在、日本語クラスだけではなく、同好会として勉強会（日本語について）を持ったり、俳句の会ができたりしています。また、会員相互の交流と親睦を深めるための「おしゃべり広場」を催したり、バス旅行（区のバス使用）をしたり、楽しい発展を見せています。なかでもうれしいのは、外国人会員からの申し出で、英会話や中国語のクラスが誕生したことです。最近は、長い間ＪＣＡで勉強した外国人会員が日本語の先生にもなりました。

これからも、多方面にわたる文化交流が行われることを望みます。いろいろな地域への広がりも大切ですが、私としては２１世紀へ向けて、ＪＣＡの内容の充実と感性豊かなボランティアグループへの発展を期待したいと思っています。

《日本語学校の立場から》

集団としての質の向上のために

インターカルト日本語学校　吉川　正則

集団としての質の向上はどのような集団であれ目指すべきものでしょう。私は現在まで日本語学校で日本語教育に従事してきました。そこで、日本語学校という集団で質の向上のために、どのようなことをしているかについて述べたいと思います。

集団としての質の向上のためには、さまざまな面での「情報交換」が何よりも大切であると思います。例えば自分の作った、あるいは使った教材などを集団に提供し、誰でもが見られるようにしておくというのも「情報交換」の一つです。

現在私が所属している学校では教師の作った、あるいは使った教材を学校として蓄積するようにしています。例えば、絵、写真、新聞の切り抜き、教師作成のプリント、例文など何でも構いません。授業の助けとなったものであれば、何でもよいのです。そして、それらは誰でもが見られ、誰でもが使えるようになっています。つまり、教材の共有です。日本語の学習者は多様性であるといわれていますが、教師のほうも多様です。日本語教育だけでなくさまざまな経歴を持っており、教材として具体化されるアイディアも豊富です。このアイディアは集団の財産であり、その集団のメンバーで共有することは集団としての質の向上につながると思われます。

《ボランティア・コーディネーターの立場から》

「コーディネーター」を置くことの勧め

武蔵野市国際交流協会　杉澤　経子

日本語教室「武蔵野方式」は、日本人にとってはボランティア活動の場、異文化を学ぶ場であり、外国人にとっては日本語を学習する場、コミュニティへの入り口の場であります。

初級レベルは、６クラスを年２期開催していますが、外国人参加者数は１３０名におよびます。中級レベルの日本語サロンには、３０名が参加しています。この活動に参加している日本語ボランティアの方々の名称は「日本語交流員」。異文化理解を中心としたＭＩＡ日本語交流員養成講座を修了した会社員や主婦、約１３０名が現在登録、活動をしています。日本語交流員は、各自できることを無理なく行うというのが原則で、教室活動を行う交流員、マンツーマンの交流活動を行う交流員と、それぞれが「日本語で国際交流」をテーマに自分に合った活動をしています。

そこで考えてみていただきたいのが、現場の活動者ではない、中立の立場で判断できるコーディネーターの存在です。日本人ボランティアの状況や外国人のニーズなどを把握・整理し、また、両者からの不満や苦情を聞き、システム作りを考えるコーディネーターの役割は、それぞれのグループ活動の特性を、より一層輝かせるものになるのではないでしょうか。